シリーズ

季（とき）のことば「夏」

「ことば」によって
豊かな四季を楽しむ私たち日本人。
名句や名歌を訪ねながら、
日本文化の豊かさをご紹介いたします。

季（とき）のことば『夏』

私たち日本人は、季（とき）に名前をつけ、
豊かな四季を楽しむ術をもっています。
季（とき）のことばの美しさを感じ、
季節のうつろいの中に
「ゆとり」をみつけてみませんか。

5月から6月にかけて、紫、青、黄、白と色とりどりの花を咲かせる「花菖蒲」は、初夏を代表する季語の一つです。「菖蒲」を使った季語としては端午の節句に入る「菖蒲湯」が有名ですが、実は「花菖蒲」はアヤメ科で、サトイモ科の「菖蒲」とは別の植物となります。菖蒲の根は漢方に、葉は保湿効果や血行を促す作用があることから、根や葉をお風呂に入れて、暑い夏に備えるという風習が生まれました。奈良時代や平安時代の宮中には、軒に菖蒲や蓬を挿し、香薬を入れて絹でくるんだ薬玉を作って邪気を払う風習もあり、「菖蒲葺く」「軒菖蒲」「菖蒲挿す」もまたこの時期ならではの季語です。やがて江戸時代に入ると「菖蒲」は「尚武」に通じるということから、端午の節句は男の子の成長を祈る武家の行事となりました。

もとは男子だけでなく万人の疫病除けだった菖蒲湯。コロナ禍も一段落した今年、お風呂で爽やかな香りを楽しんでみませんか？

はなびらの垂れて静かや花菖蒲

高浜虚子

【季語】花菖蒲

夏のことば

半夏生［はんげしょう］

夏至から11日目。この日までに田植を終えるという風習があった。この日降る雨は「半夏雨」と呼ばれ大雨になることも。

白南風［しろはえ］

梅雨が明けた後に吹く南風のことで、盛夏の到来を告げる季語。梅雨の最中に黒雲を呼ぶ南風は黒南風（くろはえ）と呼ばれる。

夕焼［ゆうやけ・ゆやけ］

陽が沈む直前に西に見える茜色の空。四季を通じて見られるが、夏空の夕焼は壮大なことから夏の季語となっている。

夜振［よぶり］

魚が強い光に集まる習性を利用し、夏の夜、かがり火や松明（たいまつ）で川面を照らし、魚をおびき寄せる漁法。

花氷［はなごおり］

美しい花を閉じ込めた氷の柱。見た目が涼しげであるだけでなく、室温も下げるので、冷房がなかった時代に重宝された。

打水

夏の夕方、家の前の道路や庭に水をうって涼を誘う昔ながらの風習。最近はエコ活動としても見直されている。

日傘

強い日差しを遮るためにさす涼しげな傘。かつては女性が持つイメージがあったが、最近は愛用する男性も。

胡瓜揉［きゅうりもみ］

夏野菜である胡瓜を薄切りにして塩で揉み、三杯酢で和えたもの。食欲がなくなりがちな夏に、涼を呼ぶ一品として。

夏の名句

紫陽花の末一色となりにけり
小林一茶　【季語】紫陽花

向日葵の空かがやけり波の群
水原秋櫻子　【季語】向日葵

手にとれば月の雫や夏帽子
泉　鏡花　【季語】夏帽子

ピストルがプールの硬き面（も）にひびき
山口誓子　【季語】プール

ビーチパラソルの私室に入れて貰ふ
鷹羽狩行　【季語】ビーチパラソル

夏の名歌

夏のかぜ山よりきたり
三百の牧の若馬耳吹かれけり
与謝野晶子

海を知らぬ少女の前に
麦藁帽のわれは両手を広げていたり
寺山修司

一期なる恋もしらねば
涼やかにはみてさびしき氷白玉
馬場あき子

※「季語」とは、連歌、俳諧、俳句において用いられる特定の季節を表す言葉。